直線的キャリア論の限界

日本人の身体観から

杵渕　友子

1．問題意識

現代が抱える社会問題は，貧困，格差，雇用，福祉，教育など，どれ一つをとっても喫緊の課題である。にもかかわらず，複雑性の増した現代社会では要因が相互依存的のため解決策を同定するのに困難を極めている。それは，解決策が見い出せないということでもあるが，むしろ解決策が多数提出されているとも言える。なぜ解決策が多数になるかというと，それらが各々の立場から発せられているからで，それぞれ基盤とする世界観が違うからである。それでも大きく見れば現代人特有の世界観もあるわけで，本論では現代人のあたりまえに抱いている世界観に焦点を当て，その再考を促し，別様の世界観の可能性を身体観から見つめなおしてみたい。そのとき身体観が世界観を決定することを二人の学者の知見に依拠して論じる。一人が生命誌を専門とする中村桂子，今一人は複雑系，自然科学を専門とする鈴木健である。

本論では身体には少くとも二つあることを仮設するが，二つの身体といえば，エルンスト・カントロヴィチの『王の二つの身体　ー　中世政治神学研究』(1957/1992) [a] が想起される。しかし本論の対象はもちろん，王ではない。本論のいうところの二つの身体は，社会学的身体と生命論的身体である。前者は社会あるいは政治生活を送るバーチャルの身体で，社会学系の学問の対象となる身体である（この場合，身体という用語が使われることは少ないが)。対する生命論的身体は，生きている身体を扱うものの，必ずしも可視ではなく，それを本論ではこの人文社会学系の論文に取り上げるつもりでいるのだから，少しく説明が必要になろう。また，そこにある学問間の飛躍については説得も必要かと思ったが，後に見るようにこれらは案外スムーズにクリア

a　カントロヴィチは，王には二つの身体があるとした。一つは生身の生物学的身体で，当然モータルである。今一つは不可視の政治的身体で，いわば仮想上の身体である。どちらが毀損されても不敬罪が適用されるが，とくに後者の場合には，その刑罰の執行ぶりがフーコーの『監獄の誕生　ー　監視と処罰』(1975/1977) に詳細に描写されるごとくの残虐なものになるには理由がある。不滅であるはずの身体を傷つけたという，あってはならないことが起きたことに対する恐怖が強く働くのである。

された。以下，生命論的身体観が世界観を形成することを論証した後，日本人の身体観の特性に注目し，日本人の身体観から生まれる世界観があるのではと進め，最後は日本人の身体観に合ったキャリア論の必要性を考察する。

2．生命論的世界観となめらかな社会

（1）生命論的世界観

16～7世紀の西欧におけるいわゆる「科学革命」[b]がもたらした恩恵を人類は，ある意味熱狂的に享受してきた。しかしながら，ダイナマイトや原子力技術の例を挙げるまでもなく，同時にそれはときに厄災をもたらまでのネガティヴな側面をもつものであることに，人類が直感的に気づいていた。わけても哲学者たちは，近代科学の技術進歩には人間の生き方の再考を迫らせるところがあると，警鐘を発してきたのである。その一人に今道友信がいるが，今道は『エコエティカ』(1990) で人類の生息圏の規模で考える倫理の必要性を説いたのであった。今回今道は措いて本論が依拠するのは，中村桂子である。

その著書『科学者が人間であること』[1]で中村は，主に大森荘蔵，宮沢賢治，南方熊楠らを引きながら，科学者は「人間は生きものであり，自然の中にある」という，このあたりまえの事実を忘れずに立論して行くべきであると訴える。急いで付け加えれば，大森荘蔵ら3人の名前から，西洋対東洋の図式を立て，これは西洋的思考を退けて東洋的思考を強調する議論であると区分けしてしまうのは早計である。日本は幕末明治初期に西洋の科学文明と政治制度を積極的に取り入れて来たのであって，中村が問い直したいのはまさにその近代文明社会だからである。近代科学がもたらした厄災の多くは，それが「想定外」だったからではなく，まずは研究者の「自然と向き合う，そこから問いを立て，考えていく」[2]姿勢が欠如していてことから来ていると主張する。そして「…その視点から近代文明を転換する切り口を見つけ，少しずつ生き方を変え，社会を変えていきませんか」[3]と提案する。すなわち中村は，自然を研究対象にしている科学者のみならず，社会を考え直す立場にいる社会科学系研究者も視野に入れているのである。さすればここで自然科学と社会科学が延長線上で繋るので，本論の出発点をあっさり確保できた。しかしながら，またこれはすでに人口に膾炙している議論でもあるからと，人文科学系の分野も自然科学に負けじと，生きものとしての人間を前提とした学問の再構築の道を探りましょうと，早急に先に進めることは慎みたい。そうなれば今までの通り何も変わらないことになる。ここはまず中村の提唱に今少し耳を傾けてみよう。

---

b　イギリスの歴史家，H.バターフィールド（1949）の提唱によるもの。近代科学の出現をキリスト教に相当する，あるいは代替するインパクトとしてとらえた。

中村がもつ懸念は広い範囲に向けられているが，とくに科学者・研究者に対しては，専門家の枠に閉じこもることなく，生活者としての感覚を持ちながら自然そのものに向き合い，自然観，人間観を養う努力の必要性を促す。言わば，観察者ではなく，当事者の立場に立てということであるが，これは「言うは易く行うは難し」である。なぜなら私たちは，生まれてこのかた，否，ガリレイやデカルト以来四百年もの間，科学的思考にどっぷりと浸かってものを見，考えて来たからである。すなわち，事物を主客二元論で捉える，二項を対立させて解を求めようとする思考態度である。そのとき，対象物はすでに（大森曰く）死物化しており，それは機械論的世界観となる。そこでは人体も心も例外とされてない。それを，生きものとしての視点，生活者としての視点でものを見，考えよというのである。すでにこの「視点」という物言いに，物事を対象化して捉える近代的思考態度が癖になっていることからわかるとおり，この世界観は剥がそうとしたとしても，すぐに強力なバネのような力によって元に戻ってきてしまう。だからこそ，言われ続けているにも拘らず，それが果たせないでいるのである。中村は，この近代的思考法を自然と人間が一体化していた中世的思考へ転換せよと言うのではない。その代わりに大森荘蔵の『知の構築とその呪縛』(1994) に依拠して，「重ね描き」を推奨する。すなわち，科学によって得た知識で生きもののすべてを説明し去ろうとするのではなく，その上に，「活きた自然との一体感」[4]の「重ね描き」をするのがよい，と。それは，科学を遠ざけるのではなく，科学の知見はそのままに受け入れ，生きものとしての実感を思い出すということである。最近の例ならば，iPS 細胞から心臓のような動きをする組織が作られたニュースに接し，最新の科学的知見を得るだけでなく，そこに「重ね描き」をして遠い進化の過程に思いを馳せ，日常語で自然と自分とのつながりを驚きをもって語ること，であろうか。そのとき気をつけなければならないのはと，中村は大森にならって，「情緒・知覚・記憶・想像・感情・意志」[5]などは「心のはたらき」ではなく，「自然のはたらき」であるとするということである。「これはわれわれの祖先がもっていた感性に近いのではないか」と中村は言う。対象を死物化させないためには，科学者自身が生きものとしての自然のはたらきを取り戻すことが求められるということは強調しておきたい。すなわち生きもの同士が出会うのである。そして，「…この感性は，以上述べて来たように近代科学と少しも矛盾しない。矛盾しないどころか近代科学の進展に連れそうべきものなの」[6]だと主張する。それを迷わせたのがガリレイ，デカルトであったと。中村は，この「重ね描き」をして見えてくる全体像を基礎にした世界観を，機械論的世界観に対して「生命論的世界観」と名づけ，「重ね描き」を拒まないという新しい視点の獲得を提唱する。機械論的世界観は活用するべきときに活用するのは構わないが，「必ず生きものとして暮らしている日常を通して考えていく，これが当面の答」[7]だと言う。これが簡単ではないことを中村も承知しているが，ただ，日本人のもつ自然観，「自然の中にある」は，「重ね描き」に有効な面をもっていると指摘する[8]。以上，科学者・研究者は機械論的世界観に「重ね描き」をした生命論的世界観をもつことの必要性を中村に準拠して

論じた。

（2）なめらかな社会―生命理論を基礎に

ここでもう一人，生命理論を基礎にした社会学の構築を提唱する鈴木健を参照したい[9]。生命科学の教科書に，「生きものは，膜で囲まれている，代謝をしている，DNA を基本に複製・増殖する，進化するという四つの性質をもち，これが生きものであることの必要で十分は条件」であると書かれているとおり[10]，鈴木も，「人間を含めた生命にとって，【膜】をつくること，境界を引くことは，生きることそのものと等しいある種の業」[11]であるというところから論を起こす。そして，DNA という細胞の中の【核】が個体全体を制御するのだが，「【膜】と【核】は私たちの認知がつくりだす仮構的な存在であり，その背景には複雑な化学反応のネットワーク，すなわち【網】が広がって」いる。そこで「【網】に着目し，【膜】と【核】はそこから生まれる現象にすぎないと気づけば，この世界の観え方は，以前とはまったく違ったものとして立ち上がってくる」[12]と，新しい世界観を提唱する。すなわちそれは，複雑な世界を単純化するために仮に引かれた境界線を消し去り，関係性を前面に出した，「なめらかな社会」に気づくことである。それは，複雑な世界を複雑なまま生きることを可能にする，新しい秩序の模索となるものである。

鈴木は，たとえば，経済と政治の歴史で反復されている権力構造における問題系についても，社会システムにおける膜と核の問題と捉える。「膜と核の問題は，生命論としてかなりの根深い起源をもっている」が，「ひとたびこのことを認識すると，…，問題解決へいたる道がはるかに険しいことが浮かび上がってくる。だが，そうした冷徹な認識に立つことによって，はじめて，その可能性の中心にわずかなりとも近づくことができるのではないか」[13]と言うのだ。鈴木は，ホッブズ，ルソー，ロックら，啓蒙思想家の名前を挙げて，社会システムの自然状態を，人間が自我をもった一個の人間として最初から存在しているものとして想定していることを突いて疑義を表明する。「人間は細胞から構成された動物であり，生態系の一部として進化的な位置づけをもった生命の一つであるという事実」[14]がある以上，「私たちは，まず生命を語り，その延長線上の存在として人間と社会制度について語らねばならない」[15]と主張する。なぜなら，「社会システムは生命システムにおける一現象に他ならない」[16]からである。生命システムと社会システムが似ているのは，「一方がもう一方を包摂する現象であることに由来する」[17]からであって，社会システムにおける膜と核の問題は，生命システムにおける膜と核のアナロジーではないことを強調する。社会システムにおける膜と核の問題は，生命システムにおける膜と核の進化的展開だからである。ここでも生命論で社会システムを語る妥当性が担保された。たとえば，「300 年前，ホッブズやルソー，ロックらの近代思想家が，社会契約という概念を発明した。…社会契約が重要なのは，社会の構成員のメンバーシップが明確となったこと（筆者：すなわち，膜で囲むこと）」[18]になるこの社会では契約主体である個人が国家（筆者：すなわち核）に所属することに

〈表１　生命史に反復する膜と核〉

レベル	現象	生物学的起源	膜と核
単細胞	細胞膜 免疫 DNA と核	私的所有 物質的メンバーシップ 制御	膜 膜 核
多細胞	神経系 体性感覚 なわばり	身体の制御 身体の所有感覚 空間の所有感覚	核 膜 膜
他者	ミラーニューロン 心の理論 自由意志と自己意識	他者の所有感覚 他者の制御 ホムンクルス	膜 核 核
社会	国境 王 社会契約	社会的な膜 社会的な制御 近代国家のメンバーシップ	膜 核 核

鈴木健（2013）p.19

なる。「生命史を概観すると，内部と外部を分離する【膜】と，小自由度で大自由度を制御する【核】が，繰り返し登場していることがわかる」[19]。ここに鈴木の言わんとするところの理解の一助に鈴木の手による〈表１　生命史に反復する膜と核〉を掲載しておく。こうした膜と核を生み出すのは背景にある複雑な反応ネットワーク，すなわち【網】であるが，一旦膜や核が生まれた後に，その本性が網であることを知覚することは難しい[20]。繰返すが膜も核も網の運動の効果にすぎないのである。〈表１〉に見る通り国境も王も社会契約も現象に他ならないのである。

近年，複雑ネットワークの研究がさかんになっているのは，コンピュータの性能があがって大規模で複雑なネットワークを解析できるようになってきたからという技術的な理由だけではないと，鈴木は言う。インターネットが社会に普及したことにより，人々の世界を見る見方がネットワーク思考になっていることも大きな要因となっているというのだ[21]。すなわち研究のトレンドもハードの開発も，個々人が変化を生み出しているということである。ここでも膜と核の運動が網を現象させていると言える。「ソーシャルメディアの進展は，コミュニケーションのあり方を，著者の言葉を使えば膜や核から網の方向へシフトさせようとして」[22]おり，「…ソーシャルネットワークは，（筆者：世界のフラット化というよりは）むしろ人によってアクセスするための社会距離が異なる状態を意味している」[23]という。この状態を表現する概念が「なめらか」である。誤解があるのは，ネットワーク社会はフラットであると思われがちであるところである。フラットな状態の場合とは，いたるところで平等で対等な状態を意味するが，なめらかな状態は，「非対称性を維持しつつも，内と外を明確に区別することを拒否する。ある状態から別の状態までは連続的につながっており，その間のグレーな状態が広く存在」[24]する状態である。このなめらかな状態は，局所的な同質性の繰り返しから生じるもので，局所性の性質こそが本質的性質を

産み出していく。世界は本来なめらかなのだが，現代がそれほどなめらかでない（鈴木によるとステップ関数の状態）[25] のは，「認知システムと社会環境の構造的カップリング」が記号的になっているからと鈴木は説明する [26]。どういうことか。「認知システムが記号で世界を捉える」とは，ある連続的情報を，識別しやすくするため，離散化させて非連続な数値に置き換えて処理することである。一例として，近代社会においては婚姻概念はなめらかな社会関係ではなく，離散的，すなわち排他的関係になっている。また，国境線という膜を設定した国家を別例にとってみると，近代の主権国家体制が生まれたのは 1648 年のウェストファリア条約以降であり，イスラームの世界ではもともと国民国家は想定されていなかった。彼らにしてみればたかだか 19 世紀以降にイスラーム世界の大半が西欧の植民地となり，様々な西欧をモデルとする改革を通して近代国家が形成される過程で出て来た概念である。このことからも，近代人にとっては疑いのない概念であるかのような国境なるものは，近代の擬制にすぎないことが知れるのだが，そのことを鈴木は生命の膜と核と網から説き起こしているのがユニークところである。鈴木はなめらかな社会の復活を訴えるというより（それは不可能な話だ），なめらかさをいくらか取り戻すことで，現代資本主義がかかえる問題（たとえば富の局在化など）が，現代のソーシャルネットワーク社会を受けて，なめらかな社会の可能性を広げるかもしれないと考えている。

近代は境界線を設ける方向で進展して来たが，現代は，先ほどの鈴木の指摘の通り，インターネットの普及，グローバル化の進展によって，人々の思考がネットワーク思考になっている。これは実は，なめらか社会がもつ傾向性である。なめらかな社会では，社会の境界が曖昧になっていく。家族，職場，地域，国家などの領域で個人の所属先が複数になり，言ってみれば個人のアイデンティティが多層化する。近代国家というのは誰を国民と認めるか，誰にメンバーシップを与えるかで，決定される。先にも述べた通り，グローバル化の進展はそれらの境界線を曖昧に，すなわち国家をなめらかにしつつあると言える。なめらかな社会の出現を端的に表している一例が，ビットコイン [c] の出現ではないだろうか。その定義があいまいなまま急速に普及しつつあるが，今後，後追いで，管理体制も監視体制も国家間で合意されねばならないところである，それは非常に困難ことであることがすでに予想できる。国家がなめらかなとき，同時に個人もなめらかである。その中間に存在する職場も，家族も，共同体も当然，なめらかである。しかし，経済，政治，安全保障の領域で境界線のもつ必然性はそう簡単に手放せない。なめらかな社会が出現しつつあり，その豊かな可能性を予感しつつも，なお境界線の必要性は残る。境界線は問題も生じさせるが，解決もまた，もたらすからである。鈴木はそれを生命理論から，すなわち核と膜が網の運動から生じるところから説き起こしたのであった。

---

c　ビットコイン（Bitcoin）とは，は公共トランザクションログを利用しているオープンソースプロトコルに基づくピアツーピア型の決済網及び暗号通貨である。（Wikipedia から）

生命にとって世界の複雑性の縮減のために核と膜は一つの解決方法である。しかし，複雑性縮減の解決方法は一つだけではないと，なめらかな社会に目を向けるのが鈴木である。すなわち，複雑さの縮減のために，「環境のほうに複雑さを押し付け，全体としての知性を増幅させる建築的手法」[27] である。この手法によって，「一部の認知リソースは解放され，複雑なまま世界を認識させる認知的余力を生み出すことができる」[28] というのだ。「ひとたびこのプロセスが走り出すと，ブートストラップ的に共有の文化が生み出されていく。言い換えると，境界線を設けて囲い込むより，「公」や「私」あるいは「個」よりも，「共」の部分をふくらませていくのである。鈴木は，「技術を環境のほうに実装することによって，私たちの限られた認知能力のままでも，新しい秩序が可能になるかもしれない」[29] と，なめらかな社会に期待をよせる。鈴木の目論みは，ネットワークで接続された世界そのものを新しいコンピュータとして立ち上げることによって，なめらかな社会を情報建築として実現していくことにあるが，ここではそれを追うことはしない。世界を境界線で分節する方向か，境界線があいまいななめらかな方向か，どちらの方向にしろ，それぞれに世界の開示と隠蔽がクロスしてトレードオフになることは明らかである。

以上，われわれの思考が無意識のうちに一定の方向で硬直していたことを知った。端的には，中村の場合は科学的思考，鈴木の場合はウチとソトを分ける境界線を設ける思考であるが，それらを見直すオルターナティヴの視点によって，現代のわれわれが抱える問題に対する処方箋が見えてくる可能性を見た。

3．日本人の身体観と世界観

中村と鈴木，どちらも生命のもつ厳然とした営みに目をむけることで生まれた議論であった。以下に述べる本論の主張がどれほど直接的に両者の議論と結びついたものか，実はわからない。ただ，中村が科学的思考に「重ね描き」をするように自然に寄り添った感覚を忘れずにいることの重要性を説き，鈴木が生命の営みから世界の複雑性縮減の方法には二つあり，そのうちの一つであるなめらかな社会の可能性を説いたことにインスピレーションを得て，その近辺の議論を試みたくなった。どちらも生命論をベースにしてはいたが，身体のことには言及していない。本論では，自然と一体感をもつのは身体であるだろうし，細胞が作り出すのは身体であろうと理由づけをし，死物ではない，生きている身体を扱った議論を目指す。

中村は，生命論的世界観は，日本人のもつ自然観となじみが深いことを述べていたが，ということは，人のもつ感覚が世界観を形成することを示唆していると言える。さらに一歩踏み込めば，感覚のないところに世界観は生まれないとも言える。身体も自然の一部とはよく言われることだが，身体観が世界観を形成するともいえるのではないだろうか。そのとき，二つの身体がある。

それを説明するために，ここで唐突だが，武闘家の光岡英稔の言葉を借りる。「頭脳が影響し

ている身体が…。本性の身体は，…」[30] と二つの身体を言う。その意味するところは，前者が観念が作り出す身体で，後者が生身の身体である。ここから本論では，前者を科学的知識（たとえば医学，生物学，解剖学，生理学など。カントロヴィチの場合は政治学）が構成する身体，後者を当人の自然の感覚（これも知識に多いに影響されるのだが）によって生成される身体の二つを仮設する。別言すると，近代になって発生した身体と自然のはたらきと同調している身体，である。現代人は前者の身体観で特に健康に関係した社会生活を送っている。とりあえずそれぞれを構成的身体，生成的身体と呼ぶ。近代人は科学の発端でもある医学の知識をもとに自分の身体を観察する。それに導かれて，実際にその通りに「感じ」たりもする。早い話が，「高血圧」と診断される基準値が徐々に下がって来ていることは周知のことだが，それは人の実感に基づいた判断の結果というよりは，様々な利権の政治力の結果という側面もあると聞く。一旦受け入れた知識（この場合は高血圧の数値）は粘着性が強く，その視点で自分は高血圧である／ないと診断し，つぎの行動を決めるのが近代人である。実感よりも，数値をまず参考にする，識別的発想である。生身の身体の発する声に耳を傾けていないといけない，とは病気になったときによく交わされる会話だが，それでも確認するのはやはり西洋医学の数値なのである。中村なら，ここでも「重ね描き」を求めることであろう。

ところで，日本の文化の特質が重層的であるとはよく言われることである[31]。宗教にしろ，文字にしろ，建築，服装，法律，制度，等々にいくらでもその例示を見つけることができる。そこで本論は，文化が重層的になっているのは，おそらく日本人の身体観が重層的だからで（身体を重層的に捉えているということ），それが認識に反映されているのではないかと考える。そして，その重層的身体は幾重にもなっており，下層に生成的身体，表層に構成的身体が重なっている。その重層的身体観が生む空間認識が，世界観を決定すると考える。

ここで日本人の身体観が空間認識を決定するという，IT ベンチャー経営者の猪子寿之のプレゼンテーションを参照したい。それは TED（Technology Entertainment Design）コンファランス主催のプレゼンテーション（YouTube）であるが，氏はそこで日頃の仕事上の経験から得た知見を披露する。まず，新奇性やオリジナリティが身上である広義のアートの分野において，無意識のうちに文化の影響を受けているという，なじみの言説の展開があり，そこにおいて日本人の描く空間が，西洋の遠近法とは異なり，レイヤーで描かれていることを大和絵を基に指摘する。すなわち，重層的であると。日本人の空間認識が重層的であるというのは，奥行きの空間表現で議論されるものであるが，日本人は近景，中間景，遠景を重層的に描くことで奥行きを表現する。一方，西洋では遠近法で，中心の一点に向かって求心的に描く方法をとる。猪子は三次元のものを二次元で表現するときの論理的変換に，彼我の文化の違いを見ているのだ。これは取り立てて新しい発見ではないが，本論はつぎの指摘に興味をもった。それは，江戸時代までは日本人の目に世界はレイヤーに見えていたからそのとおりに描いたのであって，対する西欧人の目には世界

が遠近法で見えていたから，遠近法で絵画が描かれていたという件である。すなわち，特有の目が，特有の身体が世界を編集して認識しているという点である。まず身体があって，それが世界を規定する。氏は文化が身体（目）を規定すると言っているのだが，本論はその文化的身体のさらに深層にはその目をアフォードする生成的身体があると考える。西洋から遠近法が取り入れられて以降[d32]，日本人も後天的に獲得した目で「自然に」パースペクティヴで外界を見るようになっている。しかしと氏は，現代の日本発のゲームソフトの空間表現はレイヤーで描かれているため，そのユニークさに「天才」との声が世界から寄せられるが，その創造性の基底にある文化依存性の高さを強調するのである。本論の言い方では，遠近法の下層にはレイヤーで事物を見る文化的身体が，その下には文化以前の生成的身体がある，となる。

ここから本論では，日本人の文化特性が重層的だったのは，文字通りの目が，すなわち生成的身体が世界観を形成していた，と導きだしたい。日本人の身体がおそらく重層的なので，新しい環境を取り入れるとき前段にあったものの上に段を重ねていく。西洋人の身体は遠近法的に構成されているので，ある目的に向かっていくことを強調する態度になり，次々と起こる事象はすべて目的に供する形すなわち目的と手段の連鎖で整列される。議論の仕方一つを例にとってみても，日本人の議論の仕方は宮本常一[33]の観察にその典型があるように，何日も議論が出尽くすまで議論を重ね，結果的に意図したものとは別の話で終わったりする。対する西洋は，ディベートを例にとると，対立軸を設けて二者に分かれ，相手の議論の瑕疵を突くように交代で論陣を張り，それによって両者の議論はより強化され，明確になり，最後にとりあえずの甲乙をつけて終わる。ふと，西欧人の身体はキリスト教を受け入れやすく，日本人の身体には仏教的が受け入れやすかったのではないかと大胆に言ってみたくなる。すなわち，最後の審判の日を念頭に生きる生き方と，悟りを目標としているが，一つ悟ったら終わりではない生き方，日々の営みの重なりこそ悟りとする生き方，である。以上，生成的身体観が世界観を生み出しているという論証を試みた。

4．直線的キャリア論を超えて

生成的身体観が世界観を形成しているとしたら，日本人には日本人特有の世界観があるということになる。だとしたらその一つに日本人には日本人に合ったキャリア論があってしかるべきであろう。しかし現状は，日本のキャリア教育で採用されるキャリア論のほとんどがアメリカ生まれのものを基礎にしたものである。キャリア（career）とは多義的なタームだが，人間の生涯

d　その西洋にしても，遠近法が成立したのはルネッサンス期で，狭義の遠近法と言われる。それ以前は広義の遠近法（軸測投象，他）で空間が表現されており，日本の大和絵などの絵画表現もそれで説明できる。（小山清男 p.105 他）

において，とくに職業に焦点を当てたところをキャリアと呼んでいる。キャリア論の始祖とも呼べるD. E. スーパー[34]はE. H. エリクソン[35]の発達心理学の理論，すなわち人間が生まれてから死ぬまでの生涯を段階的に区切り，それぞれに発達課題があるとしたものを基礎にキャリア論を構築した。このスーパーの業績によって以後のキャリアの捉え方が方向づけられたと言っても過言ではない。この図式は明らかに，キャリアを鳥瞰し，リニアで目的的に歩を進めていくイメージである。この時間の流れはまさに，遠近法的，キリスト教的世界観と言えるだろう。しかし人生では段階的目標を立て，計画的にそれに向かって努力をしたとしても，誰でも予想外の出来事，偶然の出来事に遭遇する。それに対しては，それをネガティヴに捉えず，チャンスに変えていく処方箋を説く議論などで[36]，主流のキャリア論を相対化せずに補強させてきた。このリニアな進化論的歴史観は1960年代の構造主義によって幻想にすぎないことが論破されたはずであるが，キャリア論にはそれが取り入れられていない。また，自己概念にしても，その主体性が幻想であることは，1980年代のポストモダン思想の潮流によって解体されたが，それもキャリア論には入ってきていない。

さて，直線的に構成されるキャリア論が日本人の身体にそぐわないとして，重層的キャリア論とはどんなものになるのだろうか。少なくとも，目的合理性一辺倒では，日本の若者の心は，そして体は動かないはずである。これはキャリア論が，観念によって，あるいはデータによって若者を説得するだけでなく，すなわち観念的身体に働きかけるだけでなく，そこに心底から納得いくもの，生成的身体に届くものがなければならないということである。生成的身体の叫びを無視して構成的身体を動かすのは，大義のために我慢を強いる，戦時下の生き方である。これは平時も有時と偽って年中危機感をあおって行動を促す「災害マネジメント」[37]の手法と同型である。ニートが増え始めた1990年代に，若者の側に原因を求めた議論があったが[38]，当時の若者が反抗的に怠惰を決め込んでいるようにしか見えないとしたら，それは先行世代の構成的な身体の見方のなせるわざで，あれは若者の生成的身体からの抗議だったのかもしれない。本論で今言えるのは，直線的キャリア観では日本人は，身にそぐわない感じがするのではないかということまでである。筆者はかつて直線的キャリア観を批判的に扱った縁起論で関係性によるキャリア論の構築を試みたが，道半ばで終わっている[39]。

5．結びにかえて

本論を閉じるにあたって，二つの疑問が残ることに触れておきたい。一つ目が，この世界的クロスオーバーの時代にあって，本論では日本人の身体観を論じたが，日本人対西洋人という図式がどれほど成立するのかという疑問である。角田忠信の『日本人の脳　―　脳の働きと東西の文化』（1978）が話題になったときも同様の疑問が提出されていた。すなわち，混血の程度，誕生

後何年間その地で暮らしたか，生育環境，等々考え始めると，そう簡単に「日本人の脳」とは言えないのではないかと。それに対する回答は本論ももちあわせていない。ただ，世界各地で発達している健康のためのエクササイズ法にしても，武術にしても，そこで暮らす人の身体から発生してきた固有のものが確かにあると言るのではないだろうか。

二つ目が，中村にしても鈴木にしても，なぜ今この議論なのだろうということである。近代が進み，ポストモダンの「ポスト」の意味が近代の「後」なのか，「後期」近代なのかで論者の立場の違いが現れるように，われわれが今どこに立っているのかの認識が議論を生み出す。中村は生物誌的生物観ひいては社会観の必要性を説き，鈴木は不連続のステップ関数ではないなめらか関数のメリットを訴える，今こそと。人はつい自分たちはキーとなるポイントに立っていると思いがちである。もしかしたら人間は常に自分たちは特別なとき　ー　今がピークであるとか，終末であるとか，過渡期であるとか　ー　を迎えているとして生きるしかない存在なのかもしれない。

【参考文献・引用文献】

1　中村桂子　2013　科学者が人間であること　岩波書店
2　同上書　pp.4 ～ 5
3　同上書　p.12
4　同上書　p.107
5　同上書　p.122
6　同上書　p.130
7　同上書　p.139
8　同上書　p.151
9　鈴木健　2013　なめらかな社会とその敵　―　PICSY・分人民主主義・構成的社会契約論　勁草書房
10　中村　上掲書　p.126
11　鈴木　上掲書，p. ii
12　同上書　p. ii
13　同上書　p.10
14　同上書　p.10
15　同上書　p.10
16　同上書　p.10
17　同上書　p.10
18　同上書　p.18
19　同上書 p.18
20　同上書　p.19
21　同上書　p.37
22　同上書　p.39
23　同上書　p.39
24　同上書　p.41
25　同上書　pp.40 ～ 41

26　同上書　p.42
27　同上書　p.44
28　同上書　p44
29　同上書　p45
30　内田樹／光岡英稔　2012　荒天の武学　集英社　p.62
31　安田登　2009　身体感覚で『論語』を読みなおす　ー　古代中国の文字から春秋社　p.280
32　佐藤忠良，中村雄二郎，小山清男，若桑みどり，中原佑介，神吉敬三　1992　遠近法の精神史　ー　人間の眼は空間をどうとらえてきたか　平凡社
33　宮本常一　1984　忘れられた日本人　岩波文庫
34　Super, D. 1957　Psychology of Careers　Joanna Cotler Books (日本職業指導学会訳 1960　職業生活の心理学　ー　職業経歴と職業的発達　誠信書房
35　Erikson E. 1994　Identity and the Life Cycle　W W Norton & Co Inc; Reissue(小此木啓吾訳 1973 自我同一性　ー　アイデンティティとライフサイクル　誠信書房
36　Krumboltz , J. D./Al S. Levin, 2010 Luck Is No Accident: Making the Most of Happenstance in Your Life and Career 2nd revised Impact Publishers（花田光世／大木紀子／宮地夕紀子訳　2005　その幸運は偶然ではないんです！　ダイヤモンド社）
37　杵渕友子　2011 「災害資本主義」型経営管理という視点　ー　なぜ労働者は従順なのか　城西短期大学紀要　第 28 巻第 1 号
38　本田由紀，内藤朝雄，後藤和智　2006「ニート」って言うな！　光文社新書
39　杵渕友子，松盛千佳，志村光太郎　2005，2006，2007　縁起的キャリア形成に向けての一考察⑴⑵⑶　人材育成学会年次大会第 3 回，第 4 回，第 5 回発表